極私的映画への招待

第13回 中之島映像劇場
NAKANOSHIMA SCREEN

2017. 3. 11. SAT.—3. 12. SUN. 国立国際美術館 B1階講堂

3/11 | PRG.A / 13:00-《15日間》鈴木志郎康
PRG.B / 15:00-《極私的エロス・恋歌1974》原一男
※上映後に原一男監督トーク

3/12 | PRG.C / 11:00-《私小説》かわなかのぶひろ
PRG.D / 13:30-《草の影を刈る》鈴木志郎康

入場無料 / 全席自由 / 先着130名

※各日10:00から当日の各プログラムの整理券（1名様につき1枚）を配布 ※各プログラム入れ替え制

＜主催＞国立国際美術館、東京国立近代美術館フィルムセンター ＜協賛＞ダイキン工業現代美術振興財団 ＜協力＞イメージフォーラム、疾走プロダクション

国立国際美術館
THE NATIONAL MUSEUM OF ART, OSAKA

第13回 中之島映像劇場

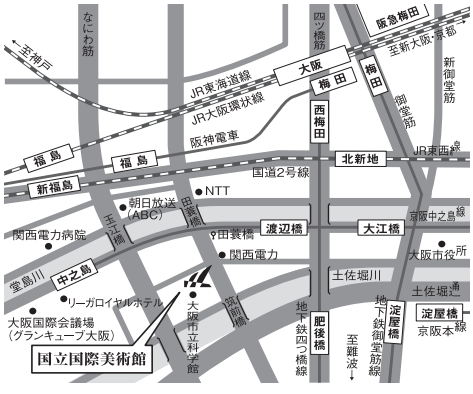
主催／国立国際美術館
　　東京国立近代美術館フィルムセンター
協賛／ダイキン工業現代美術振興財団
協力／イメージフォーラム、疾走プロダクション

極私的映画への招待

「極私的」：極めて私的なことが、映画作品という開かれた表現として共有されることについて、この語の発明者とされる鈴木志郎康の映画作品を中心に見直してみましょう。
芸術を自己表現として捉えるならば、表現者の（作者）の体験や思考は、表現物において重要な意味を持っているはずです。一方、映画はエジソン、リュミエールの時代から、一種のアトラクションとして普及していったため、いかに観客の要望に応えるかということに腐心してきました。それ故か、映画をひとつの芸術形式として考えたとき、この乖離がいつも目の前に横たわることになります。今回紹介する作品郡は、方法論は異なるが、作者の私的な事柄を扱った映画であり、それらは言わば作者の手に映画を取り戻す行為でもあります。それぞれの「私」をご覧いただければ幸いです。

鈴木志郎康、原一男作品は東京国立近代美術館フィルムセンターの所蔵フィルムで上映します。

東京国立近代美術館フィルムセンター
National Film Center
The National Museum of Modern Art, Tokyo



国立国際美術館
THE NATIONAL MUSEUM OF ART, OSAKA

関西から文化力 POWER OF CULTURE

お問い合わせ：06-6447-4680（代）
〒530-0005 大阪市北区中之島4-2-55
4-2-55, Nakanoshima, Kita-ku, Osaka 530-0005
http://www.nmao.go.jp/

京阪電車中之島線「渡辺橋駅」（2番出口）から南西へ徒歩約5分
地下鉄四つ橋線「肥後橋駅」（3番出口）から西へ徒歩約10分
ＪＲ大阪環状線「福島駅」、東西線「新福島駅」（2番出口）から南へ徒歩約10分
阪神電車「福島駅」（3番出口）から南へ徒歩約10分

当館には専用駐車場はありません。ご来館は電車・バス等をご利用ください。心身に障害のある方で、車で来館される場合は、当館北側の有料駐車場をご利用ください。

国立国際美術館では、本上映会時に次の展覧会を開催中です。
1月28日（土）-4月16日（日）
「クラーナハ展―500年後の誘惑」
1月28日（土）-4月9日（日）
「走る筆、おとろえぬ情熱。ピエール・アレシンスキー展」

A 3.11 SAT. 13:00- 《15日間》鈴木志郎康 1980年, 16ミリ, カラー, サウンド, 90分

撮影・構成・編集：鈴木志郎康
1979年11月19日から15日間、作者はその日にあった出来事をカメラの前で語るというルールを自分に課す。この映画を用いた日記は、実践の中で徐々に「私」とカメラ、「私」とカメラの向こうにいる架空の観客との間の関係について語り始める。作者にとって過酷であったというこの行為は、当初「自分自身を暴露するという意図で作った」が、「自分」の不確かさを確認することとなる。極私的でありつつ、透徹した実験性に貫かれた作品。

鈴木志郎康

1935年（昭和10年）、東京生まれ。詩人、映像作家。十代後半より詩作を始める。1963年から78年にかけて、NHKの映画カメラマンとして勤務。詩誌「凶区（きょうく）」同人。1968年、詩集『罐製同棲又は陥穽への逃走』によりH氏賞受賞。猥雑でナンセンスな「プアプア詩」は、新しい詩のスタイルとして文学界にセンセーションを巻き起こす。職業的な映画カメラマンとしての仕事と並行して個人映画の制作を始める。身近な風景や、知人、自分自身をモチーフとする独自の映画話法を生み出す。「極私的」という言葉は鈴木氏の造語である。

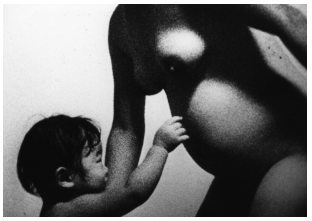
B 3.11 SAT. 13:00- 《極私的エロス・恋歌1974》原一男

1974年, 16ミリ, モノクロ, サウンド, 98分　　※上映後に原一男監督トーク

監督・撮影：原一男、製作：小林佐智子、録音：久保田幸雄、編集：鍋島惇、音楽：加藤登紀子
「私にとって映画はコミュニケーションの方法」という原が、かつて一緒に暮らし子どもまでをなした女を追って沖縄へ行き、彼女が自力出産を行なうまでを捉えた作品。
「極私」の極致へと到達した未踏のドキュメンタリーとして、原一男の名を一躍知らしめた問題作。「生きることの原点を描ききった」「見る者を強烈にとらえてゆさぶり続ける恐ろしい映画」「真実を見ることの衝撃」などの絶賛を浴び、日本列島のいたる所で若者の強烈な支持を集めた。
※《極私的エロス／恋歌1974》には一部性的な場面がございますので、ご注意ください。

原一男

1945年（昭和20年）山口県生まれ。映画監督。東京綜合写真専門学校在学時に重症心身障害児に出会い、ショックを受け、障害者の世界に関わるようになる。この時期、映画制作を志望していた、小林佐智子と出会い、紆余曲折を経て監督第一作『さようならCP』（1972年）につながる。この後『極私的エロス・恋歌1974』（1974年）、『ゆきゆきて、神軍』（1987年）、『全身小説家』（1994年）とドキュメンタリー映画の社会通念から逸脱した作品を発表し、世界的にも大きな評価を得ている。



C 3.12 SUN. 11:00- 《私小説》かわなかのぶひろ 1996年, 16ミリ, カラー, サイレント, 102分

1987年から1992年にかけて年一本のペースで作られてきたシリーズ『私小説1-6』をベースに構成された長編作品。8㎜で撮影された映像が、16㎜に拡大され、上映速度を引き延ばされることにより、日常の風景が誰のものでもない記憶のイメージへと変容する。
「作品で描こうとしていることをあえて言葉にするならば、“記憶の軌跡”である。しかし具体物を撮るカメラでこれを描くのはとても難しい。」（かわなか）

かわなかのぶひろ

1941年（昭和16年）、東京生まれ。映像作家。1960年代前半より映画制作を始める。「ジャパン・フィルムメーカーズ・コーポラティブ」「日本アンダーグラウンド・センター」など日本における実験映画・個人映画の配給組織の設立・運営にかかわる。1971年に「アンダーグラウンド・センター」を設立、1977年に「イメージフォーラム」に改称。実験映画の配給だけではなく、若手映像作家の育成、出版も手掛ける。元東京造形芸術大学教授。作家・オーガナイザー・教育者として日本の実験映画・個人映画を文字通り牽引してきた一人である。

D 3.12 SUN. 13:30- 《草の影を刈る》鈴木志郎康 1977年, 16ミリ, モノクロ, サウンド, 200分

撮影・構成・編集：鈴木志郎康、音楽制作：谷田部純、録音：石川早人、作曲・演奏：遠藤賢司
この作品は、ほぼ一年間の心境の変化を語る日記として展開する四部構成になっている。第一部は、1976年11月28日より12月31日まで。第二部は、1974年12月31日より1976年10月20日まで。第三部は、1977年1月1日より2月25日まで。第四部は、1977年3月20日より10月16日まで。
このころ作者はNHKにフィルムカメラマンとして勤務するかたわら、様々な雑誌に発表する原稿執筆に追われ、原稿を早朝に起きて出勤する前に書いていた。第一部では、早朝起きて原稿を書くとき、窓の外に見える日の出に心動かされ、それを撮影するというところから始まり、「日記映画」を作ろうと考え、12月末まで撮影する。団地住まいの窓からの眺め、家族の姿、近所の商店街、新聞やテレビの画面など撮影。
映画は過去に撮りためた映像を組み込みつつ、映画を通じて露になる作者の心情を表していく。そして、同時に自己言及的にこの映画そのものが映画の中で語られていく。